

聞名仏教

第 135 号 毎月発行
(発行日) 2021 年 12 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/
振替 00930 (7) 146886

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

胸の中の公園

佐々木蓮磨

『法味寸感』

佐々木蓮磨

私の寺の檀家に、中島シカという熱心な女性の同行がおりました。若い頃から熱心に聞法をつづけた人であり、晩年老衰のため家を出て聴聞することができなくなりました。しかし、彼女は床に臥しておりながらも、法悦の信境は少しも変わることはなかったようです。

喜ばせてもらいます。」と喜び、つづいて言うには、「ご院主さん！近頃公園地の夜桜が非常に美しいと言っていて、近所の人達は老いも若きも夜桜を見物に行っておるようでありますが、私は、おそらく死ぬまで公園の夜桜を見ることはできないと思います。しかしご院主さん！

室に坐して花を見、月を見る能わざるものは、なんと不自由であるかな」と憐れまれたということを聞いておりましたが、全く、この老婆の信境と一致していることは、不思議なように見えて不思議でない事実であると思います。

* 聖書に「人々黙せば石叫ぶ」というスバラしい語があるが、まことに意味深長である。最近ある老坊主が、病臥の中で、静かに庭を眺めて「小鳥のさえずるのも、木の葉の紅葉も、すべてが念仏念法の心を起こさせてくれる。人間にはウソがあるが、自然にはウソがないからありがたい」と述懐して、法悦の涙にどよんでおられた。この坊主には、教学の素養はないが、生きた仏に出会っている姿として尊く拝まれた。

私の町は旧城主の城跡が公園になっておりまして、非常に風景がよいので有名であります。特に桜の名所で、春の桜花の頃は花の下に数百個のボンボリがともされて、夜桜の観客で賑わうのであります。

私は一生涯公園地の美しい夜桜を見ずに死んでも、少しも残念には思いません。私の胸の中はいつも南無阿彌陀仏の公園がありますから」と言っていて、ニコニコしながら念仏しておりました。

法然聖人は「念仏を信ぜんと人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知のともがらに同じて」と示され、またあるときは「安房の介という一文不通の陰陽師が申す念仏と、源空が念仏と、全くかわりなし」とおせられたおことばが、今さらのよう

* 聖人が、この世に残された最後ののおことばは「こころもおよばれず、ことばもたえたり、南無不可思議光仏」の一句である。このおことばのうえに、肉体の聖人が消えまして、如来が生きて輝いておって下さるようには拝するのである。

ある年の春、私は今の老婆を見舞うたことがあります。老婆は大そう喜んで「ご院主さん！ようこそこのむさくるしいところへおいで下さいました。私はご院主さんとは思えぬ、全く如来様がおいで下さったと

清沢満之師が晩年、花見遊山に行く人々を見て「一

対他力の信をいよいよ仰がずにはおられないのであります。

(了)

取り越し苦勞について

寺報9月号の「住職雑感」

で「嫌なことやしんどそうなことも実際に当たってみると、思っていたほどの苦ではない場合が多い。人生苦は取り越し苦勞の苦の方がずっと多いと思う。」というように趣旨のことを書きましたが、このことをもう少し詳しく述べたいと思います。

人生生活上の不安はいくつもありましょう。不安があるから取り越し苦勞をするのですが、仏教の教えの中に五怖畏^{ふい}というのがあります。五怖畏とは「不活畏。死畏。悪名畏^{あくみやう}。墮悪道畏。大衆威徳畏。」です。不活畏というのは、生活不安なこと、将来「食うていけなくなるのではないか」という不安。死畏とは「死への不安、死ぬのではないか」という不安。「悪名畏」とは「自分への悪い評判や評

価への怖れ」です。「墮^だ悪道畏」とは「死後に地獄道や餓鬼道という苦しみの境界に落ちるのではないか」という不安。「大衆威徳畏」とは「大勢の人を前にしたときにおびえる怖れ」。

こういう不安や怖れの他に「病氣への不安」や「人から見捨てられてしまうという不安」、或いは「環境破壊や戦争に対する不安」もあります。

こうした不安が起ると、今はそうなっていないのにもかかわらず先取りして思い煩い、取り越し苦勞というのです。貯蓄も目減りしていき、年金も減ってきて「将来食えなくなるのではないか」という不安を持っている人、今は健康だけれども「癌にでもなったらどうしよう」という病気の不安、あるいは、今は一人でなんとかやっつけていけるけど、痴呆症にでもなっって一人で家

の中で倒れたらどうしようという不安など、いくらもあります。この頃では「コロナに感染して重症化したらどうしよう」というのもありますね。こうした不安の元に「死畏」、いわゆる「死の不安」があり、これが根本の不安とも言えます。このようにいろいろ不安が過剰になると、鬱^{うつ}になつたりノイローゼになつたりもします。

そういうことで人生の苦しみは、実際に苦しい事にぶつかって苦しむことよりも、今はそうなっていないのに早くから悩んだり怖れたりする取り越し苦勞の方がずっと多いと思います。

実際に三度のご飯が食べられないという苦難にぶつかると、「食えなくなるのではないか」と前もって悩む方が多いし、そういう憂苦が長いこと続くものです。実際にはな

らなうい、それを思い煩いと

いいですが、この苦しみは文字通り「思い」の苦ですね。実際の飢餓状態での苦しみは空腹感とか体のだるさや力なさなどであつて、不安や思い煩いの苦はまさに「思い」「想念」「妄想」の苦で、実際には現在無いのに苦しんでいるのです。これは人間特有の苦であるといわざるをえません。

犬や猫が将来「食うていけるかどうか」を思い悩んでいる様子はありません。

こういう意欲で9月号に書きましたら、これを読んだ方から「これからは取り越し苦勞を止めるように努力をします」というメールを頂きました。そう受け取られるのが当然ですが、ただ、取り越し苦勞を止めたいと思ってもそれは難しいと思ひ、「それよりも現在ただ今生きていること、今まで生かされたきた不思議な力に目を向けてください」と返事をしました。思い煩いをしてないでおこうというのはとても難しいからです。

しかしこれだけでは分かりにくいのでこのことについて少し詳しく述べたいと思います。

実は以上の問題について『聖書』(マタイ伝)にイエスの有名な言葉があります。

「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である」

と。現在を離れて、どうなるか分からない未来の事まで思い煩わなくてよい。思うとしてもその日その日に考えたらそれで十分だ、といわれていると思います。いわゆる取り越し苦勞をするなどいわれるのでしよう。イエスは「取り越し苦勞をする必要は無い」と言われるのですが、実はこう言われる直前にイエスはこういうことを言っています。少し長いですが引用してみます。

「あなたがたのうちになだれが、思い悩んだからといって、壽命をわずかも延ばすことができようか。なぜ衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのようにに育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。榮華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも

着飾ってはいなかった。

今日は生きていて、明日は
炉に投げ込まれる野の草でさ
え、神はこのように装って
くださる。ましてあなたがたに
はなおさらのことではない
か。」(マタイ六の二十五)

思い煩う前に、目の前の一
本の野の花を見てみなさい、
と言われるのです。なんと不
思議な限りないのちの働き
が躍動しているではないか。
その神秘的ないのちの働きが
現れている野の花の装いは、
ソロモン王の豪華な宮殿の飾
り以上ではないかと。野の花
でさえそうなのだから、あな
たがたのいのちにも不思議
ないのちが働いているではな
いか。野の花として働いてい
る同じいのちに私たちもいま
で生かされてきたし、今もこ
こに生きています。そして、そ
のいのちは将来も生き続ける。
どこまでも生き続けているそ
のいのちに気づけよ。「今ここ
に生きています」という単純な
事実。この事実のところを量
りないのちがはたらいている。
将来どうなるうとこのい
のちの中なのだから、そんな

に思い煩うことはない。この
ようなことをイエスは教えて
いるのではないでしょう。

「私が今生きている」、この
事実は私が考えてこうなった
のでもなく、私が努力してこ
うなっているのでもない、ま
た誰が作ったのでもない。

「いや私が努力したから生
きてこれなのだ」と言います
が、努力することができると
も、考えることができるのも、
それを可能にする元のはたら
きがあるからであります。も
のごとを「考える」ことがで
きるというのも不思議なこと
です。不思議ないのちがはた
らいているからでしょう。「生
かされている」「生かされてき
た」という言葉はあまりにも
通俗化し、しばしば言われる
ので感動が薄いのですが、実
際は驚くべき事実ではないで
すか。目が物を見る、耳が音
を聴くということだけでも神
秘です。佐々木蓮磨師は「今、
現に生きています事実(ありの
まま)が、一大不思議、この
ほかに仏なし。」と言っていま
す。

こういう一大不思議のいの

ちに生かされてきたのであり、
もつと言えよこの不思議な
いのちの働きの他に「我」と
か「私」などという実体はな
いのであります。私のいのち
も押さえてみればアミダ仏(量
りなきいのち)のほかにはあ
りません。

この量りなきいのちに触れ
ることこれが仏教であります。
そうすると、生まれたのもこ
のいのちの中で生まれ、生き
るのもこのいのちの中で生き、
老いていくのもこのいのちの
中で老い、病気になるのもこ
のいのちの中で病気になる、
死ぬのもこのいのちの中で死
ぬ。しかし、このいのちは死
なない。無量のいのちです。
の「自己」です。

そうすればイエスが野の花
を見てみよ、といわれたのは、
私たちがこの花に躍動してい
る大いなるいのちを見よとい
われるのであり、このいのち
が私たちの真実主体いわばい
のちの親であり、このいのち
を離れて私がいけないというこ
とを知れというおさとしでは
ないでしょうか。

量りなきいのちのアミダ仏

が共にいてください、抱いて
いてくださっている。このア
ミダ仏は将来私がどのような
状況になろうとも、私と離れ
たまわれない。不安を抱え、取
り越し苦労をしている私はど
こに落ちてもアミダ仏のお手
の中と知らされます。

生かされているということ
は本当は驚くべき事なのです
ね。生かしている働きをアミ
ダ仏とも如来とも言い、もし
て「助かるとは、如来が私の
主となつてくださること」(佐
々木蓮磨『法味寸言』)なので
す。

ただし、一生、肉体に執着
する煩惱がとれない私ですか
ら、思い煩いの不安は無くな
りませんが、しかし執着があ
り煩い悩みは続きましても、
アミダ仏に掴まれているとい
う居り場が与えられています
ので、そこに少しでも気がつ
いていくと心の底は少しずつ
明るく、軽やかになっていく
のではないのでしょうか。
ですから、取り越し苦労をす
まいと励むよりは、今私は我
ならざる働きによって生かさ
れており、生かされてきて今
ここに居るのであり、そのお

力は私自身となつてくださつ
ていること、そこに目を向け、
このいのちに少しでも触れる
と、取り越し苦労は自ずと少
なくなるのではないでしょう
か。

さらに申しますと、私のい
のちの主体である無量寿なる
アミダ仏は私がアミダ仏に目
を向ける前に、私の方に目を
注いでくださり、ご自身が南
無阿弥陀仏の言葉となつて、
私たちに喚びよめに喚んでく
ださっていたのでした。南無
阿弥陀仏はアミダ仏が「ここ
にいる。汝と共にいる」「我は
汝の親であるぞ」と知らせて
くださる言葉であり、この南
無阿弥陀仏を称え聞く生活の
ところに量りなきいのちの働
きを知らされ思い煩いから少
しづつ解放されてくるのであ
りましょう。(了)

〈遠方法話予定〉

*二〇二二年一月十六日

名古屋別院「信道会館」

(対面所にて)

午前十時より十二時

「本願成就文について」

信心夜話

昭和四十四年に大谷派の本山である「東本願寺」の中の研修部同朋会館に勤めました。当時は大谷派の同朋会運動が大変盛んな頃で、同朋会館へ全国から奉仕団研修ということで2泊3日の間、聞信徒の方々が研修に来られました。清掃、本山内の諸堂の拝観、勤行やお内仏のお給仕の仕方などの外に、法話を聞いて夜は座談会をするという内容でした。法話は教導の先生が語り、夜の座談会は補導が司会をして話し合うというのが研修内容でした。私は補導の仕事をしていました。そのころの教導先生の法話は仏教入門あるいは真宗入門の話を日常生活の事例をとりあげて語るというのが殆どでした。しかし座談会は盛り上がることもあり、かなり突っ込んだ内容になることも時々ありました。中にはベテランの補導がいてかなり厳しいやりとりが座談でなされたものです。

その頃の大谷派の教学は安田理深先生の教学が中心でした。そこで補導や教導の間ではよくいわれていた話に、「人間は自分の都合を中心に生きています。都合が悪いと苦しみ、都合がよいと喜ぶ」「自分の都合だけで生きていようと、自分の姿を知るのが大事である」「自分の都合という思いが自力であり、事実が他力である」「仏法は自我の思いに先立っている事実、身の事実に目覚めることである」「身の事実はすでに助かっている。身の事実は都合のよいことも悪いこともすでに引きつけている。引き受けられないのは自分の都合という思いである」「思いを超えているありのままの事実に戻れ」などがよく語られていました。実際、自分の都合で苦しんだり喜んだりしていることはよく分かります。これからピク

ニックに出かけようとする雨が降ってきた。「ああいやだなあ」と嫌う思いが起る。しかし傘屋さんは「ああいいう雨や」と喜ぶなど、凡夫は自分の都合中心に生きていっているというような法話がよく語られ、自分中心の我執我愛の都合を中心とした生活をしている私であったと知らされていったのです。こんな話もあります。昔、有名な沢木興道禪師が熊本市に居られた頃、熊本の旧制高校の生徒の幾人かが禪師の所で座禅を組んでいました。その一人が東京大学を受験し、失敗して落胆しそれを沢木師に話したところ、師は「悲しむことないじゃないか。お前より優秀な者が入学したのだから」といったという。これなどは如何に私たちが自己中心的な生き方をしているかを知らされます。

「身の事実」、「アリノママの事実」に目覚めるとか事実には帰るとか、既に救われている事実がつかつかいいう、そういう「事実」とは何か、「身の事実」にどのようなようにして帰るのか」かが分からないまま、そこで留まってしまうなり、戸惑ってしまうことで終わっていったのが殆どだったと思います。ただ自分の浅ましさとか間違いつかを知るといふ効果がありましたので、それなりに有意義ではありましたが、「思いを超えている事実」という事実を自覚するということへは距離があり、それを突破してその事実に目覚めた人もありませんが、多くはその手前でうろろろするばかりでうやむやになっていったと思います。

この場合の「事実」とか「身の事実」とは何か。それについての説明は殆ど聞いたことはありませんでした。ですからただ漠然とイメージされるばかりでした。それこそ「事実」を「思い」でイメージし、「事実」という思いの中に留まってしまう。「身の事実」といつても、「身の事実」と言っている思い」があるばかりで、事実そのものに目覚めることは至難のことでした。なにか理屈は分かったようですけれども、いよいよよとなると分からなくなる、という始末でした。こうして同朋会運動は聴聞が大事、自分を知ることが大事と知らされましたが、その先の「真実」の手前で留まったままになっていったと思います。

実は「この事実」「ありのままの事実」「身の事実」は人間の側から目覚めることも掴むことも知ることにも触れることもできないのであります。自我（思い）ではまったく不可能と知らされます。

むしろその「事実」（真実在）から人に働きかけ、喚びかけて、人を摂め取ってください、南無阿弥陀仏の名号を聞く、聞き受ける、それがおのずから身の事実に帰ることになっているのでした。ですから本願の念仏を称え、アミダ仏の大悲を聞くことがなければ、「事実」にストレートに帰することは難しいことです。